

臨死体験に見られる完全情報・完全知覚

完全理解・完全コミュニケーション

齋藤 忠資

- ① 脳と肉体を超えた意識は、もはや脳と肉体感覚器官に依存してはいない。時間と空間の隔たりからも自由になっている。非局所の宇宙意識は、主体と客体（対象）の境界（バリア）がなく、対象の万物と一体になる。私は万物になる。最も、私という（I am）個は存続しているが、私（個）は、すべての個を分離できない仕方一つで一つの全体として一体となっており、分離はできるが、全体から切り離してバラバラにはできない（オーケストラの音楽のように）。非局所意識には肉体感覚器官のようなものはなく、すべての対象と一体になることによって知覚する。私が万物になるのである。従って近い対象とか遠い対象といった距離はない。可視光線のスペクトルによって見るのではなく、可視光線のスペクトルと一つになって見るので、360度すべての方角を同時に見ることができる（上下・前後・左右といった方位はない）。

一例を挙げよう。

「魂の私は見るのではなく、万物と一つである。私は見たいと思うものになる。意識の核心（魂）が対象になる。私は万物と一体になるので、近いとか遠いということは意味をなさない。近いものも遠いものもない。可視光線のスペクトルを見るのではなく、可視光線のスペクトルと一つになる。この宇宙の面（相）は他のものとの違いはないので、私は360度すべての方角を同時に見た。（左右・前後・上下）」1)

- ② 脳・肉体意識は、物質によって条件づけられている（時間と空間による制約、四つの力〈重力・電磁気力・二つの核力〉による条件づけ）。人間の身体にすべて宇宙の星によって作られた物質によってできているので、同じ物質でできたものを知覚するように作られている。従って、障害者が存在する。身体の五感外界の情報に依存している。その外部から入力した情報を脳が解釈しイメージ等を作る。身体感覚はコード化とコード解読を伴うので、誤解を生じる。それに対して脳と肉体を超えた意識は、物質によって条件づけられていないので、制約のない完全意識となり、障害者もいない。

「私は物質や状況や制約によって条件づけられていない慈しみと制約のない感覚によって取り囲まれた。」2)

「肉体の五感・思考・感情が消えると、突然は光がスイッチオンし、私は自己意識の内なるマインドで知覚した。そこには肉体の限界はなかった。魂の私は宇宙に接続するために感覚器官を必要とはしていない。魂の私はテレパシーのように機能する。私の視覚と聴覚は、私の変化しているマインドに従う。私は私が考えるものを見、そして聞く。それは受動的ではなく能動的認知プロセスである。魂の私の知覚はもはや物体

や距離に制約されていない。魂の私はエネルギーに似たその基礎的な形を通して、事物を理解するので、私には怖れや気かりや悲しみなどはなく、真の安らぎとハーモニーのみがあった。私の感情的反応は、外部の状況や周りの世界と接続していなかった。私の身体は重傷なのに、魂の私はとても安らかであった。魂の私は音によってコミュニケーションせず、思考を通して直接コミュニケーションし、テレパシーにとって機能した。魂の超感覚コミュニケーションでは、思いが直接かつ即時に伝わる。」 3)

光の完全意識は、脳と肉体の意識・思考・感情や感覚・知覚などに依存せず、別のものとして分離独立している。「肉体を超えると、我々は覚醒でもって、すべての時間と空間を横断する。肉体の五感はない。我々は純粋意識である。」 4)

④ 完全情報の共有

- ① 臨死体験の光の世界では、統合的全体意識は愛の絆によって、すべての光の存在が完全に相互に結合し合って、分離できない仕方一つとして一体になっていて、すべての存在が完全な情報を共有していることを、我々はすでに考察した。5) さらに臨死体験では、自己意識のコアが肉体の制約から解放され、時間と空間の制約を超えて、宇宙全体に非局在的に遍在し、完全な全体意識に拡大することによって、宇宙全体に関する完全な全情報を獲得することも、我々はすでに考察した。6)

この論文では、まず光の世界の統合的全体意識が、完全な全情報を備えている例を補足しよう。ここでは全情報がすべてのものを一つに結び付ける愛の絆と関連して出ていることが、重要である。

「純粋なエネルギーである光の体は、全知識と無条件の愛と一体性が備わっていた。」 7)

「すべてを包む光があり、その光にはすべての知識と愛があった。」 8)

「光の存在には、全知識と全面的な愛があった。」 9)

「巨大な光の中心点は、全知識と愛を放出していた。」 10)

「光の世界には限りなき知恵と無条件の愛があった。」 11)

「白い光には、全知識と完全な愛と歓喜と完全性と祝福が備わっていた。」 12)

「体外離脱して、多くの宇宙を巡り、宇宙を支える全知識と愛を知った。」 13)

「この光は全知識を持ち、全てを愛している。」 14)

愛に直接言及していない例もある。「光は遍在する宇宙意識なので、全知識を備えていた。」 15)

全知識が図書館のイメージで出る例がある。「光の世界の図書館は、床から天井まで本ばかりの巨大な部屋で、無限に続くように感じた。」 16)

「アカシクレコードが建物内の今に保存されていて、人類の歴史の全情報がそこにあった。その建物で未来を見た。全情報は肉体に戻った時、消去された。」 17) 全知識は臨死体験者が肉体に戻ると失われてしまう。

「光の世界では、全てはユニヴァーサルメモリという仕方で記録されている。最も些細なことも。」 18)

臨死体験では、光の存在は臨死体験者のことをすべて知っていたという例が多く見られる。その光の存在の臨在のもとで、臨死体験者の人生再検査が生じる。19) 臨死体験者本人が知らないことや忘れてしまったことも再現される。光の存在は（死者も含めて）臨死体験者の死ぬ時も知っているので、“まだ死ぬ時ではない。”と言って、臨死体験者を地上に戻す。

- ② 臨死体験者の自己意識のコアは、肉体から解放された後、光の存在に変容するので、光の存在と同様宇宙に関する全情報を獲得することを、我々はすでに考察した。20) ここでは代表的な例を補うことにする。

宇宙の歴史や仕組みに関する情報を入手したという例

「死んだ祖母は、神・命・宇宙の創造・永遠の広がりに関する知識を、私に与えてくれた。地球の歴史や地球以前の人間の存在の歴史や、私が知らなかった原理・事柄や地上に生まれる前の私自身。我々は地上に生まれることを選択し、試練に直面することを選んだ。」 21) この例は我々が地上に誕生する前に、スピリットとして先在していることを前提としている。

「私はその時創造の始めから終わりまでの、すべての完全な知識をガイドから与えられた。」 22)

「過去と現在と未来のすべてのものの知識に、私はアクセスした。宇宙の本性が明白になった。そこには完全な秩序があり、私は宇宙の本性の一部となった。」 23)

「突然光が私を貫いた。心を集中すると、すべてのものの完全な知識を得た。その分子構造や化学的構造や完全なデザインとその歴史や宇宙における位置などが、計算したり考えたりすることなしに、浮上してきた。」 24) この例では意図や注意によって宇宙の構造についての科学的知識が努力なしに得られると言われている。

「神は宇宙の英知を私に与えてくれた。自分がいつもこの英知を求めていたのだということに気付いた。私はできるだけひとつ残らずに吸収したいと願った。神の光の中に浮きながら、私はこの英知が自分を突き抜け、吸収されていくのを感じた。英知も愛と同じように、霊に流れ込み脈動するように、存在そのものにしみ込んできた。神は無限の英知を持ち、私のことをすべて知っていた。」 25)

「私は宇宙の知識に満たされた。学問的な知識ではない。1 + 1 = 2 というものではない。それは霊的な知識である。人生の意味や我々はどこからやってきたのかとか、我々はなぜ存在するのかといった。」 26)

「さまざまなレベルの多くの事柄の知識が、私のマインドに瞬時に現れた。すべての時代の知識が、私のマインドに一度に現れたかの世だ。」 27)

ここでは一度にまた瞬時に多くの知識が与えられたと言われている点が注目される。

「光に包まれ、全知識と完全理解を得た。人生の目的についても。」 28) ここでは全知識

と完全理解が関連している。

「光は全知識があり、光と一体になると、全知識が与えられた。」 29)

「光の存在には全知識があるので、すべての疑問はなくなった。」 30)

「光と一体になると、全知の感覚が私を包んだ。すべての疑問に答えが与えられた。」 31)

「光の世界では死んだ母が出現し、私の全ての疑問に答えてくれたので、私にはすべての知識が授けられた。」 32)

「隠されたもの、あいまいなものはない。無限の知恵と知識が溢れている。この物質界のバリアや制限はない。時間はない。」 33)

「一度この光の中に入ると、私は私が誰かを思い出した。」 この宇宙を創造した者のように、いかに宇宙が働くか、物質学等、私は学んだのではなく、思い出した。」 34) この例では、宇宙のしくみや私の本質を新しく学んだのではなく、思い出したという(想起)。完全な世界である光の世界の完全情報を、地上での肉体時には忘却し、肉体から解放されたときに再び想起するという点は、プラトンの説と同じである。光の存在時の完全情報は、臨死体験者が肉体に戻ると、肉体と脳の制約を受け(脳バルブ説)、一部を残して大部分が失われ、不完全なものになる(忘却)。臨死体験の記憶も一部しか思い出せない。

② 超脳・肉体意識の完全知覚

- ① 脳・肉体を超えた完全意識は、空間の制約がないので、固定した位置(場所)や形姿というものはない。従って固定した身体や身体の中の五つの感覚器官というものもない。典型的な例を挙げよう。

「私が光の存在に変容した時、肉体の時の視覚は解体した。我々が光の中の意識のより高いレベルにシフトすると、肉体時の視は消滅する。」 35)

「私はすべての事を一度に感じた。肉体の五感のような分化はなかった。」 36)

「私は目なしに見、耳なしに聞き、口なしにコミュニケーションできた。今が本来の状態であり、肉体は一時的な本来的でない状態である。」 37)

「私は体を備えていなかったのだから、目で見ただけでも、耳で聞いたのでもない。何かを感じたのでもない。別の感覚を備えていた。」 38)

「私は光を肉体の感覚ではない知覚で見た。それは他のレベルに存在する。」 39)

「光の世界には、肉体感覚はない。」 40)

「私には形姿はなく、両眼もなかったが、感じることができた。私には心がすべてであった。」 41)

「私は目を持っていなかったが、光を見た。」 42)

- ② 脳と肉体を超えた完全な超意識は、自ら全感覚を備えている。「光の意識は肉体のエゴに依存していない。超意識自体が超感覚を備えている。」 43)

「見ることができるものは、何もなかった。すべてはすべてを包む存在の覚醒における経験であった。すべてはすべての感覚を一つとして機能する覚醒である。肉体と相互作用する必要はない。視覚というものは、肉体の時の様には存在しない。知覚されるすべては、最も密度の濃い光の覚醒として経験された。私はコミュニケーションの手段が全く必要のないこの源の覚醒になった。Onenessであるこの源の一部に、私はなった。」44)この例は、完全意識は全体として一つの全感覚を備えていて(非局所在)、肉体のように五つの感覚に分化(局在化)していないことを示している。

「光はすべてを認識するアウエアネスであり、地上の肉体の感覚を超えている。」45)

「私は私の光の存在全体で声を聞いた。私の耳ではなく。」46)

この例は、肉体は五つの感覚器官に分化(局所化)しているが、光の存在では全体が一つの知覚になっていることを示している(非局所性)。

「色・香り・感情の感覚はアップし、真の感覚で経験した。耳で聞いたのではなく、私の存在で聞いた。」47)

まとめると、脳・肉体を超えた完全意識は、肉体の感覚に依存することではなく、自ら独自の完全な知覚能力を備えている。完全知覚は口と耳と言葉なしに直接、即時に意識同士でコミュニケーションする。完全意識は時間と空間の制約がなく、不可分の全体として一体となっているので、宇宙の全情報を保持し、完全意識全体で一つの完全知覚を備えていて(非局所性)、肉体のように五つに分化していない。完全情報は完全知覚(360度完全視覚とテレパシー)と完全理解等として具体化される。

① 360度の完全視

臨死体験の中には、360度の完全視覚を備えていたという例も多く見られる。臨死体験者には肉眼はなく、肉体を超えた超意識の完全視覚を備えている。非局在意識はすべての対象と一体となるので、空間の制約がないので、方角というものはなく、非局在的な360度の完全方位視覚を備えている。光の世界では完全意識は、空間の制約がないので固定した形はなく、非局在的に遍在しているので、360度視覚が可能となる。48)すでに発表した論文で挙げた例以外の例を引用しよう。

「隣の部屋に注意を向けると、妻と三人の人々が見え、六人の女性は、その部屋の左側に立って別の看護師と語っていた。妻は診療室へとゆっくり歩いていた。一人の女性は、私の担当医と働いている看護師と思われる。私は二人が私に治療をしているのを見た。同時にすべてを見ることができた。視野というものはなかった。」49)

「光の世界では、振り返ることなしに360度見えた。」50)

「私は360度見ることができた。上下・前後を同時に欲するだけで見ることができた。」51)

「体外離脱後、トンネルに入る前に、私は360度視野を備えていた。私は上下・左右・

前後を一度に見ることができた。私は全方位を同時に見ることができた。」 52)

「海で溺れた時、上から 360 度のすべての方角を私は見た。自分の前後・上下を私は光と共にすばやく移動した。」 53)

「湖で溺れかかり、体外離脱し、水面下の自分の肉体を上から見た。360 度で自分の周りが見えた。」 54)

「私はすべての方角を見ることができた。私の後方も。私はすべてのものを知覚できた。」 55)

「私はすべての方角を一度に見ることができた。」 56)

「野球をしていた時、心臓発作で倒れた。その時、私は広い野原にいた。全方角ではるか遠くまで見えた。草の葉のすべてのどの細部も見え認識した。私は全方角からのすべてのものを見、認識することができた。」 57)

「私は宇宙の中心にいて、全方位で完全な 360 度の視界を体験した。」 58)

「私は私の体の上に浮上し、私の周りを同時に 360 度見ることができた。」 59)

「体外離脱して天井付近から、同時にすべてのものを見ることができた。それがどこで起ころうと。壁は見ることを妨げなかった。」 60) この例は、透視と結びついている。

「私はすべての方角を同時に見ることができた。見るばかりでなく、私の周りにあるものが分かった。五感以上の多くの感覚を備えていた。」 61) すでに考察したように、4次元空間からないし五次元時空から、3次元空間のものはすべて同時に見ることができると。

360 度視覚といっても、具体的には二つのケースが考えられる。a) 顔を回転させることなしに、自分の周りを 360 度同時に見える。b) 立方体の対象を顔を回転せずに、一度に 360 度の角度から見える。a) のケース：トンボのように球状眼球を備えていれば、顔を回転せずに、周りを 360 度同時に見ることは三次元空間でも可能である。臨死体験者は肉体を超えているので、球状眼球の肉眼を備えているということはある。しかし臨死体験者の自己意識のコアは、意識の光球体であり、光球体全体が視覚を備えていたという例は見られる。62)

「私は光球であった。もはや人間の姿をしていなかった。私の意識は球状で、一度に全方向 360 度を認識できた。」 63) ここでは球状視覚を備えているのが意識の光球であって、肉眼ではないということに注意しなければならない。

「わたしは 3 次元をみることができた。まるで身体を持たずに浮上する眼球であるかのように。私は全方向を一度に見ることができた。我々が考えるような方角も大きさもなかった。」 64)

「まるで自分の目が巨大な球になって、すべてのものを見ているか、あるいはまるですべての方向が同時に見える視点に自分の目があるかのように思われた。」 65)

「心拍が 20 分間停止した時、私は 360 度同時に見ることができた。私の背後を見ることができた。私には背中がなかった。私はボールのサイズであった。私はいつどこで

何が起こったかを正確に知ることができた。まるで私が遍在しているかのよう。」66) ここでは自己意識のコアが、非局在的に遍在していて、すべての出来事を知ることができたと言われている(全知)

K.リンクとS.クーパーは、先天性全盲者が臨死体験時に持つ視覚は、肉眼ではなく、光球体の意識全体で知覚するので、360度の完全視覚が可能となるとみている。67)光球体意識全体が視覚になっているということは、肉眼のような感覚器官は存在しないということである。肉体に見られる五つの感覚器官というものは存在しない。

「私はその時まるで存在全体で、目と耳を持っているかのようであった。私はすべてのものに気付いていた。」68)

「私は両目がなかった。しかし私はすべての方角を同時に見ることができた。見るばかりではなく、私の周りにあるものが分かった。五感以上の多くの感覚を備えていた。」69)

「私は身体を備えていたが、肉体とは全く別のものであった。私は浮動する眼球のように、360度一度に見えた。そこには方向も大きさもなかった。」70)

「自分の生涯全体が、360度のパノラマの仕方で見ることができた。」71)

b)のケース：臨死体験では、立方体を顔を回転せずに、同時に360度の角度から見たという事例がある。代表的な例を挙げよう。

①肉体を超えた意識になって、3次元空間の立方体が360度の角度から一度の見えたというケース。

「私は生まれて初めてベッドの上の自分の身体を3次元で見た。鏡に映った自分の姿は平面でしかない。霊の目はあらゆる方面から、同時に見てしまう。」72)

「わたしは物体や人を360度の視界として、見ることができた。」73)

「肉体を超えて、私はベッドの上の自分の身体を360度一度に見た。」74)

「光の世界では、天使を360度の角度から見ることができた。」75)

光の世界には空間の制約がないので、固定した形や位置(場所)というものはないが、ホログラムのように光の存在が現れる。光の存在は意識の光球体である。立方体を顔を回転しないで、一度に全方角から見るということは、トンボのような球状視野でも不可能である。この事が可能なのは4次元空間を考慮しなければならない。臨死体験の光の世界は、4次元空間にあり、そこには物体や肉体に基づく空間の制約がないので、固定した方角・位置(場所)・形・大きさ・へだたり・主体と客体の分離と言うものはない。4次元空間から3次元空間の立方体を、すべての角度から一度にみることができると。76) P.ウスペンスキーによれば、4次元空間は「測定できるものはない。立方体と共通するものはない。左右・上下・立体線・図形と似たものはない。同時にこのすべてが存在する。距離はない。弛緩的特性(内的類似性や相違性・共感・反感)によって距離は決まる。」77) 内的類似性と相違性・共感・反感というのは、意識の意図・注意と思念形態を意味している。典型的な例を引用しよう。

「光の世界には方向も大きさもない。川や谷と言った場所もない。私は人間・場所・物体といった名詞であることを止めて、行動という動詞になっていた。」78)名詞ではなく動詞であるということは、物体ではなく物理学で言う場であるということである。

「あそこは私がここと思った瞬間、ここになった。こことかあそこというのは、私と
言う存在が、その瞬間に定義する尺度に過ぎない。」79)この例は肉体を超えた非局在
意識の思いによって、空間の位置(場所)・形・大きさ・方位・距離(隔たり)などが、
ホログラム的イメージとして定まることを示している。(思念形態)

「肉体を超えた時、あそこをここと感じた。」80)

② 肉体を超えた自己意識のコアは、非局在意識として遍在していて、すべてのもの
と一体になっているので、肉体のような空間の制約がないので、方位もなく、360度す
べての角度から一度に立方体を見ることが出来るものと考えられる。非局在意識は360
度視覚のみではなく、遠隔透視・内部透視を含めた完全視覚を備えている。81)典型的
な例を挙げよう。

「私は顔も体も持っていなかった。私はどの方向にも顔を向けることはなかった。360
度同時に見ることができた。空間の中の眼球であるかのように、私はすべてのものが
分かった。私は遍在する全面的な覚醒であった。360度すべてのものを見ただけではな
く、人間が備えていない別の感覚ですべてを知った。それは宇宙の知識であった。」82)

「人間は霊体とメンタル体を備えている。肉体を脱いで霊体とメンタル体になる。霊
体とメンタル体は完全な知覚能力を備えている。光の世界は心眼の中にある。思いは
心から相手の心眼に伝わるので、私が私の心眼で自分を見るように、相手も私を見る。」
83)

宇宙に遍在する非局在意識については、臨死体験ではないが、瞑想の例がある。「瞑
想中は肉体から解放され、透過性の光の流れとなって、全身の気孔から外に流れまし
た。肉体という殻に限定されていた感覚が拡大され、周囲の原子すべてを自分の体と
して感じる。今や広大な全方位的視野に変わって、上下・左右・前後の一切のものが
同時に知覚された。」84)

「深い瞑想状態の一つの間、とても深くて驚く体験をした。私の両目は閉じているが、
突然すべてのものを見ることができた。部屋全体の中の自分を。どこから私は見てい
たのか分からない。私の両目から、あるいは一つの視点から、私は見ていなかった。
至る所から私はすべてのものを見ていたようだ。私の体のすべての細胞と私の周りの
すべての粒子の中に、両目があったようだ。私は同時に前方から上から下から背後か
ら等など見ることができた。見られた物から離れた観察者はいないようだった。覚醒
のみがあった。」85)

この非局在的完全視覚は物質化されて肉眼になると、空間によって制約され局在化さ
れる。こうして非局在意識の完全視覚は、肉眼の不完全視覚になる。

③ 臨死体験では、物質を超えた光は時間と空間を超えて、遍在していてすべて方位か

ら照射している。代表的な例を挙げよう。

「光は全方位に放射していて、光を遮るものはない。」 86)

「いたるところに黄金色の光があり、輝いていたが方向はなかった。」 87)

「光は特定の方向から来るのではなく、光自体が方向を具体化する。」 88)

情報が 360 度の全方向から来るというケースもある。

「脳はひとつのことにしか集中できないけれど、光の中では情報が全方向から同時にやってきたが、私は同時にその全てを理解できた。」 89)

「情報は全方向から多次元を通して、私にやってきた。」 90)

④ 全盲者の完全視覚例

我々はすでに生まれつき全盲者が、臨死体験時に視覚体験をした例について考察した。

91) ここではいくつかの例を補おう。

a) 「ある年配の女性が長年糖尿病のために失明した。心停止して、蘇生法中に昏睡状態になり意識を失った。その時突然脳・肉体を越える意識にシフトして、窓の近くから、医者がいそいで挿入した静脈チューブをとうして薬を投与し、彼女の胸を強く打ち、肺に空気を入れるのを見た。蘇生中に医者ポケットから一本のペンが落ち、彼女がいる近くに転がるのを見た。その医者は彼女のそばまで来て、そのペンを取り上げ、ポケットにしまった。そしてその医者は蘇生法を続けた。回復してから彼女がポケットから落ちたペンのことを話し、どんなペンだったかや、蘇生法の他の詳しいことを述べると、その医者はショックを受けた。」 92)

b) 「ある盲人が病院で傷口の縫合後、胸に痛みを感じた。蘇生法がなされると、突然肉体を越える意識にシフトして、病院のカフェテリアに聞くと、そこで私の母が待っていた。ビーという警告音が鳴ると、少し離れた部屋に居た看護師が処置をするように言われた。その看護師が注射を用意するために、薬瓶をとって開けようとして、瓶を落としてしまった。瓶の破片が一面に散らかっていた。回復してからその看護師に、離れた部屋で薬瓶を割ってしまったのではないかと聞くと、驚いた様子で私に詫びた。」 93)

c) 「ある全盲の女性が臨死体験をし、突然肉体を越える意識にシフトして、隣の部屋にいる人たちや彼らの衣服や他の物の色を見た。回復してからその女性が見たことは、すべて正しいことが確認された。」 94)

臨死体験では肉体を越える完全知覚にシフトして、肉眼ではなく非局在意識で見るので、視覚障害者も見える。

② 完全聴覚 (テレパシー)

- ① 肉体を超えた意識は、統合的全体意識になり (不可分の全体性)、個として分節できるが、主体と客体の分離はなく、時間と空間の制約なしに、互いに思いを直に通じ合わせることができる。口と耳という肉体の感覚器官なしに、従って言葉という媒介物なしに、完全な仕方直接情報を共有し合う。(完全理解・完全コミュニケーション) 口と耳は

空気の振動を媒介として情報を伝えるが、光の世界には空気（物質）は存在しない。肉体の五官のように感覚は5つに分化していず、完全意識全体が感覚のセンターになっている。非局在の完全意識は、テレパシーや読心という超感覚を備えている。95)

典型的な例を引用しよう。

「私は宇宙と結合し、私と似た他の存在たちは、エネルギーと純粹意識の形であった。我々はひとつなので、テレパシーでコミュニケーションした。」96)

「聴覚の明晰さははるかに優れていた。音は私の耳ではなく、私の体に入ってきた。」97)

「話すのに口は動かさず、口もなかった。言葉は聴覚によるのではなく、感じるものであった。言葉ではなく、私の最も深いコアに感情を送った。」98)

「光も魂も物質界の声を発し、耳の鼓膜を振動するのではない。心の中に情報の塊を届ける。」99)

「発せられる言葉はなかった。耳で聞くのではなく、心で聞いた。心の内で思うと同時に、言葉や絵の形で心に直に答えがわかった。」100)

「私は口を動かさなかった。いいたい事柄を含む衝動を持っただけであった。相手は直ちにそれを捉えて私に答えた。相手も口を動かさなかったが、私は内なる耳で相手の声の音を聞いた。それはメンタルな伝達であった。」101)ここでも思念形態が関係している。

「光の存在には言葉がない。光の存在の考えや動きは親密なエネルギーを作り出し、それは私を無言の理解で満たして、心の芯まで染み通らせるものである。102)

「会話中も死んだ祖母の唇は動かなかった。祖母の声は私の耳にではなく、私の心に響いた。思いが私から語られた言葉のように発せられた。私は唇を動かさなかった。」103)

「美しい草原で私の存在のすべての粒子が、私が聞こえたものを吸収した。声を聞いただけでない。私は光が語ったことを感じた。」104)

「美しい野原で6・7人の人の言うことを、私は耳で聞くというよりもむしろ感じた。」105)

「光の中で私は死んだ元恋人と会った。私は思い通りに動くことができた。我々は言葉なしでテレパシーでコミュニケーションした。彼は私についてすべてを知っているようだ。私がどこから来たのか、又私がかつて感じた感情・体験・思考すべてを。」106)

「プールで溺れた時、私は思いを通じてコミュニケーションした。声はなかった。」107)

「死んだ隣人と会った。彼女は口を開かずに話した。彼女の思いが私の心にじかに届いた。私の思いも彼女の心にじかに届いた。それはテレパシーの様だった。」108)

- ② 肉体を超えた意識は、非局在意識になって、言葉と口や耳なしに、思いをじかに通じ合わせるということは、テレパシーは時間と空間の隔たりを超えているということである。臨死体験には、質問すると同時に答えが分かるという例が多く見られるのも、時間の隔

たりなしに、情報が伝わるからである。時間と空間の制約は肉体によって生じる。

- ③ 言葉による意思の伝達には、誤解や嘘や隠し事が生じるが、心から心へのじかになされる伝達には、私は相手と一体になっているので、誤解や嘘や隠し事は生じない。典型的な例を引用しよう。

「言葉なしに思いがじかに相手に伝わるので、誤解は生ぜず、嘘をつくことは出来ない。」
109)

「完全なコミュニケーションでは言葉は用いない。言葉にはうそ・誤解・口実が伴う。言葉なしに心から心へじかにコミュニケーションする」 110)

「光の存在が話すと同時に、相手に心を読み相手の言うことが分かった。私が話そうと思うと同時に、相手に私の思いが分かってしまうので、うそをつくことができない。」
111)

「光の世界では思いを隠すことは出来ない。」 112)

「思いがじかに相手に伝わるので、秘密というものはない。」 113)

「霊の世界でのコミュニケーションはテレパシーである。質問すると同時に答えがわかる。相手が思ったことはすべてわかるので、隠すということは出来ない。」 114)

「光の存在同志はすべて言葉なしのテレパシーでコミュニケーションした。すべてはオープンされ、隠すことは何もなかった。」 115)

- ④ 肉体を超えた意識は、言葉という媒介なしに、従って口と耳という感覚器官を用いずに、私と相手とは一体になっているので、じかに意思を通じ合わせる。代表的な例を挙げよう。

「耳と口によるコミュニケーションではなく、それはマインドによるコミュニケーションである。耳に伝わる音はなく、私のマインドにじかに通じた。」 116)

「光の世界では、目と耳を 用いず、言葉の音もない。マインドからマインドにじかに通じる。」 117)

「光の存在同志は言葉ではなく、マインドでじかにコミュニケーションした。」 118)

「すべての知恵と愛は、光の存在から思念伝達によって伝わった。」 119)

「私には体はなく耳もなかった。私は他の存在の思いを、私の心の中に持った。それはテレパシーのようなものであった。他の存在の思いを私は共有した。」 120)この例は光の存在は完全な統合的全体意識(ソウルファミリー)として一体になっていることを示している。

「光の存在は私の思いが読めるので、私は光の存在と言葉で話す必要はなかった。」 121)この例は光の存在同志は互いに相手の心が読めることを示している。

「言葉はなかった。思考は肉体よりも鮮明で速い。私のマインドと意図の持続時間は、驚くほど鮮明なのでよく理解できた。思考とアイデアがマインドからマインドへじかに伝わった。」 122) 肉体を超えた意識の振動数は、肉体意識よりも高いので、肉体意識よりもはるかに鮮明で速いものと考えられる。

「我々は口を動かして話さなかった。マインドからマインドにじかに伝わった。光の存在

には私の思考と感情が言葉で言わなくても分かった。私が自分を知る前に。」 123)

「我々は言葉で話すのではなく、思考とマインドで完全な仕方でコミュニケーションした。」

124)

「死んだいということ言葉なしにコミュニケーションした。言葉という媒介物なしにじかに互いに意識・気持・動機を即時に通じ合った。」 125)

「死んだ私の周りには、人々がいた。彼らは話すのではなく、私の思考を通じて私に語りかけた。私が心で思うと、いつでも私の思いを通じて答えてくれた。」 126) 肉体を超えた非局在意識は、他者の意識と一体なので、即時に相手の心と通じ合うことができる。

A. Suleman は臨死体験について次のように述べている。「非局在意識は肉体の制約から解放されているので、肉体のコミュニケーションの条件となっている言葉という媒介を通さずに、肉体がないので、時間と空間の制約なしで、意識同士がじかに即時にコミュニケーションする。これがテレパシーや読心という超感覚現象である。」 127)

「言葉は時間と空間の境界内のものであり、霊は時間と空間を超えている。霊には言葉はない。」 128)

時間の制約がないということは、時間の隔たりがないということであり、即時にということである。空間の制約がないということは、距離がないということであり、主体と客体の分離がないということである。非局在意識は不可分の全体として、完全な統合的全体意識（ソウルファミリー）になっている。

「霊とテレパシーで我々は会話した。知識と洞察のダウンロードは、私の霊のエネルギーの強化に似ている。知識と洞察を受信するのは、私の霊であって肉体の脳ではなく、知識は私の霊に蓄積され、私の肉体の脳の記憶ではない。」 129) この例は臨死体験の記憶には、肉体を超えた意識のエネルギーが関わっていることを示唆している。事故などで脳傷害を起こし、全てに記憶を失うが、臨死体験の記憶だけは長年にわたって鮮明に起こるといふなどはこの点から解明できよう。 130)

⑤完全理解と完全コミュニケーション

テレパシーは言葉と肉体の感覚器官なしに、心から心へじかに思いが即時に完全な仕方で通じ合うので、完全なコミュニケーションの形であり、完全な理解のとなる。代表的な例を挙げよう。

「テレパシーはコミュニケーションの最も純粋な形であり、誤解が生じる余地はない。相手と同じものを見、感じ、思いが即時に伝わる。」 131)

「光の思考パターンが私の思考パターンに、テレパシーのように超光速で知覚された。それは完全なコミュニケーションで、どの点から見ても完璧であった。問いに対しては言葉なしに即答された。」 132)

「光の存在との私のコミュニケーションは、言葉によらず、完全な思考という仕方で行われ、誤解というものはない。完全に理解し合った。私には口も耳もなかった。それは完全なコミュニケーションであり、誤解や口実の余地はなかった。心から心にじかに通じ

た。問うと同時に答えられた。その光の存在と私の間に、純粋な愛による心の完全な結合が見られた。それは霊の完全交わりであった。」 133) この例では完全なコミュニケーションと理解は、愛による心同志の完全な結合から生まれると言われている点が重要である。

「6人の霊とコミュニケーションした。すべての感情と思考が同時に生じた。時間はなかった。時間の感覚はコミュニケーション中の個人によって生じる。物理との時間ではない。口調は特定の魂と同一のもので、物理的に耳に聞こえるものではない。すべてがオーバーラップして一度に起こった。完全に明確な仕方で、あいまいな点はない。肉体の制約から解放されると、物質界の外で、真のコミュニケーションが行われた。」 134)

「我々是一个のものとしてコミュニケーションした。言葉でなしにテレパシーで。すべての思いは、一つの感情であれ、ある量の情報であれ、即時にかつ完全な理解と共にやってきた。メッセージには誤解はなく、統辞論の問題もなく、知性の違いもなかった。」 135)

「光の世界ではお互いのコミュニケーションはテレパシーでなされた。お互いの思いが即時に分かり、完全に理解できた。」 136)

「イエスは話すとき、口を動かさなかった。私も話すとき、口を動かさなかった。話したいと思うと、話す前に相手の言うことが分かった。まるで相手の心を読んでいるかのよう。」 137)

⑤ 非局在意識の世界は意識の波動の世界であり、光の存在も波動エネルギーの場の焦点であり、波動によってコミュニケーションしている。典型的な例を引用しよう。

「光の世界では、光の存在はユニバーサルな波長にあり、私はこのユニバーサルな体験の部分であったので、思考を投射することによってコミュニケーションし合った。」 138)

「光の存在同志は脈動によって結ばれている。」 139)

「光の存在は脈動を通じてコミュニケーションし合っている。」 140)

「波動のようなものが、ことばとしてメッセージを伝えた。」 141)

「死者とは、思念波を通してコミュニケーションした。私は話したのではなく思念で答えた。」 142)

「光の世界には言葉はなく、思念波が一瞬の内にテレパシーで読み取る。」 143)

「光の世界には、人々は言葉ではなく、マインド波でコミュニケーションした。」 144)

「振動数が増すことで高次元界の達し、そこでは思念波の即時伝達によって、テレパシーでコミュニケーションした。」 145)

ここではテレパシーは、思念伝達と考えられている。同じ内容の例を引用すると、

「コミュニケーションは、思考と感情によって直接なされた。他の存在が私に向かってある思いを持つと、即時にその思いは私の意識に入ってくる。」 146)

言葉と口・耳の感覚器官（肉体）なしに、思念伝達で光の世界のコミュニケーションがなされていることは、物質はなく、超意識の光の世界では、思念形態が重要な要素になっている点と関連していよう。光の存在は、光の世界の普遍的に遍在する振動を通じて、その思いを波動の形で互いにコミュニケーションし合っているのであれば、次の臨死体験例も理解

できよう。

「人間の声のような音楽が、私たち一人一人から聞こえました。各人が自分自身の音色の音程を持っていました。しかも全部が溶け合って、調和のとれた歓喜の合唱となっていました。あなたが考える時、その思考と同じ位美しい情熱的な音色が、あなたから発せられます。そして、各々その人の思考が合わさって調和した一大交響曲となるのです。つまり、愛という言葉話す代わりに、私たちの思考がこれと同じものを意味する音色を作り出すわけです。」 147)

ここでは光の存在の思いの波動が、多様な音色を発して光の世界全体として、調和した音楽を形成していると言われている。これは、光の世界ではすべてのものが音色を発して、全体として完全な調和した音楽を形成していると言われていることと関連している。

ある臨死体験者は次のように証言している。「光の存在とは、テレパシーで言葉なしで、心から心へじかにコミュニケーションした。身体は持っていなかった。私は未知の実体から作られていた。純粋な光の焦点のように、我々は我々の周りに遍在している光の中の光の点に似ていた。どの人もすべての他者が心で思ったことを即時に分かった。他者から何かを隠すことは出来ず、又その必要もない。誤解をすることもない。我々は皆個人であったが、同時に皆一つであった。愛の破られることのない絆によって永久に結合され、我々の周りの光の世界の光と一つにされた。我々は光の世界の一部であり、他者の光の一部であった。」 148) この例では光の世界では、すべての光の存在は光の愛によって一体とされていて光の部分であるので、完全なコミュニケーション（テレパシー）が可能となると言われている。

肉体を超えた意識にが、宇宙に遍在する非局在意識の一部になることによって、完全なコミュニケーションが可能になるという例がある。

「神は私の思いをすべて直に知り、テレパシーで答える。私のマインドは裸であった。私は純粋なマインドになった。私がトンネルを通過中備えていたエーテルの様な体は、もはやなかった。それはユニヴァーサルマインドと出会った私の個人的な知性であった。」 149)

「肉体を超える意識になると、すべてのものと一体になり、ユニヴァーサルマインドの一部になると同時に、救急車にいる人々と一つの意識になった。」 150)

宇宙に遍在する非局在意識というのは、個人意識のコアの統合体としての全体意識ということである。

耳が聞こえない人のケース

肉体を超えた意識は、言葉なしに口と耳を用いずに、テレパシーで光の存在や死者と意思を通じ合わせるので、肉体時に聴覚障害者も、完全にコミュニケーションできる。光の世界には聴覚障害者はいない。しかし肉体に戻れば、耳は障害のままなので、再び聴覚障害者に戻る。典型的な例を引用しよう。

「私は生まれつきの聴覚障害者で、他の人とは手話で会話した。しかしバリアを越えようとした時、バリアの向こう側の約 20 人先祖たちと、テレパシーで会話した。多くの人とテ

レパシー出来るとは信じられなかった。先祖の一人が私はまだ死ぬ時ではないとテレパシーで言った。天使は言葉で話すことなしに、私をスキャンして私を知った。天使は”あなたの時は今ではない。あなたには地上でやるべきことがある。”と云った。」 151)

「重度の栄養失調による大脳麻痺が原因で、幼児期から難聴。11歳の時川でおぼれる。突然肉体を超える意識にシフトして、光の存在が話すのがよく聞こえた。すべてのシラブルが明確に、すべての単語がオーケストラの音楽のように響いた。光の存在は口を使わない。光の存在が話すと即座にすべてが分かった。私が話すと同時に相手の心を読み、相手の言うことが分かった。私が話そうと思うところが、同時に相手に分かるので、うそをつくことは出来ない。」 152)

「生まれつき耳が聞こえない人が、5分間臨床死した。突然肉体を超える意識にシフトして、子供たちが助けを求める声が聞こえ、夫が私を救おうとしているのを上から見た。夫の背中をタッチするが、夫はなにも感じず、聞こえない。どうして生まれて初めて自分の声を聞くことができるのか、不思議に思った。この時私は白衣を着ていることに気づいた。すると突然“まだ死ぬ時ではない。戻りなさい。”という声を聞いた。」 153)

「幼児期から難聴の人が、臨死体験中はそれまでよりもはるかに聞こえた。イエスとテレパシーで会話した。会話は鳴り響く音楽の様であった。」 154)

「耳で何も聞こえない人が、突然肉体を超える意識にシフトして、生まれて初めて声を聞いた。」 155)

「耳の聞こえない人が臨死体験をして、天の音楽を聞いた。」 156)

「生まれつき両耳とも難聴の人が、臨死体験中音を聞いた。距離に関係なしに、ただ聞こうと欲するだけでよかった。」 157) この例は耳なしに聞こえることが、肉体を超える意識の思念形態の現れであることを示している。

⑤ 完全理解・完全コミュニケーション

① 光の世界では、光の存在は愛の絆によって完全な仕方で、相互に結びあい一つの分離できない全体をなしているので、主体と客体の分離はなく、対象と一体になれる。(万物一体)したがってすでに考察したように、完全に情報を共有し合っていて、完全にコミュニケーションしているので、隠し事も誤解もだますこともなく、完全に理解し合っている。完全な理解は完全な愛に基づいている。典型的な例を引用しよう。

「網戸を通り抜け、純粋に透明な明るい光、キラキラ輝く白い光に向かって昇った。その光は美しくとても明るく輝いていたが、少しもまぶしくなかった。この世の光とは全く異質であった。光の中にある人物を見たというわけではないが、その光には特別なアイデンティティがあった。それは完全な理解と完全な愛を持った光であった。」 158)

「光は完全で絶対で無条件の愛と理解と共感で包む。ひかりは霊のエネルギーの源である。」 159)

「光の存在は愛と理解で満ちている。」 160)

以上の例は愛の絆によって完全な理解が成り立つことを示している。

「光には温かさと愛と万物の知識と完全な理解があった。」 161)

「光には全面的な理解があり、私はユニヴァーサル・スピリットの一部であり、万物の一部であった。」 162)

② 肉体を超えた意識が、光の存在になると、光の存在のように相手と一つになり、完全に理解できるようになる。代表的な例を挙げよう。

「私は輝く色鮮やかな光に囲まれながら、すべての事を理解し始めた。一瞬にして自分の人生の目的を思い出した。それがすべてであり、完璧であることを悟った。」 163)

「光はこの世界の人間が見えるようにし、安らぎと受容と、浸透するすべてを理解する力を与えた。」 164)

「光と出会うと、純粋な知識を持つようになり、多くのことが理解できるようになった。」 165)

完全情報と完全理解を備えた光の存在同志の間には、隠し事はなく、全てが明らかにされている。」 166)

「霊の次元には秘密はありません。私の過去に起きたことも、未来に起きるすべてを霊の存在は知っている。」 167)

「私の思考プロセスを隠す場所はない。」 168)

「光の中に入ると私は光になった。私はすべて理由が分かった。過去にあったものと未来にあるものすべてが分かった。」 169)

「トンネルのトップから頭をだすと、全てが見え理解できる巨大な球体に入った感じがした。」 170)

ここで重要な点は、光の存在は 360 度の全方向から同時に来る情報を、同時に完全に理解できるということである。

「脳は一つのことにはしか集中できないが、光の中では情報が全方向から同時にやってきたが、私は同時にそのすべてを理解できた。」 171)

まとめ

① 脳と肉体を超えた意識は、脳と肉体感覚にはもはや依存しない独立した非局在意識である。肉体意識は物質化から出来ていて、地球の表面を無事に生きるために、物質の世界を知覚するように作られているが、非局在意識には、時間と空間の隔たりがない。空間の隔たりがないので、宇宙の至る所に遍在できる。(透視) また非局在意識には固定した場所や大きさや形がない。方角もないので 360 度完全視野となる。主体と客体のバリアがないので、主体はすべての対象と一体になって知覚し理解しコミュニケーションする。時間の隔たりがないので、過去にも未来にもアクセスでき、誕生・成長・老化・死という人の流れがない。従って因果関係もない。過去も未来もすべて現在になる。非局在意識の世界では、

時間と空間のバリアがないので、すべての個は全体から切り離すことができない仕方で、一つの全体として一体になっている。(完全な全体意識) 非局在意識に個は、すべての対象と一体なので、完全情報に基づく完全知覚と完全理解と完全コミュニケーションを備えている。

②光の完全意識は完全知覚を備えているので、光の世界には知覚障害者はいない。しかし知覚障害者は肉体に戻ると、元の障害者に戻ってしまう。172) 光の完全意識は全体で一つの感覚センサーとなっているが、肉体の場合には5つの感覚器官に分割されていて、空間的に配置と形と大きさと方角が固定され制約されている。情報の伝達にも時間がかかる。光の世界で得た全情報も肉体に戻ると殆どを忘れてしまう。(脳フィルター説) 173) K.RingとS.Cooperは、人間の意識は1) 脳と肉体に基づく通常の知覚を備えているものと。2) 脳と肉体を超え意識から構成されていて、肉体の意識の時には、肉体を超えた意識は、肉体によって制約されているが、肉体の制約から解放され脳と肉体を超えた意識にシフトする。また脳と肉体を超える意識は、肉体と脳から独立して存在できるとしている。174)

③ 脳と肉体の意識と知覚は、光の完全な意識と知覚が、物質の世界で生きるために、時間と空間によって制約された仕方で投影されたものである。長い進化の中で、特に人間の脳が光の完全意識と知覚を不完全な仕方であるが、受信できるようになったものと考えられる。(脳受信装置説)

註

- 1) www.nderf.org/NDERF/NDE_Experiences/gustave-p-ste.htm
- 2) www.nderf.org/bryan-z's-nde.htm
- 3) www.nderf.org/nderf/nde.Eperiences/bell.c.nde.htm
- 4) A.Moorjani,Dying to Be Me,Hay House,2012,143
- 5) 私論、不可分の統合体としての光の世界、人間文化研究13, 9~10
- 6) 私論、意識の拡大と脳による制約、人間文化研究、14, 56~57
- 7) L.Martin,Searching for Home,Cosmic Concepts,1996,125~127
- 8) www.nderf.org/denie-s's-nde.htm
- 9) K.Ring,Lessons from the light,Insight Books,1998.275.299
- 10) J.Cressy,Near-Death Experiences,The Christopher Publishing House,1994,28
- 11) www.nderf.org/sammys-NDE.htm
- 12) www.near-death.com/smith.html
- 13) P.Fenwick,Brain,mind and beyond,inD.Lorimer(ed) Thinking beyond Brain,Floris Books,2001,40~41
- 14) J.Antonette,Whispers of the Soul,29
- 15) www.dharma-talks.com

- 16) www.nderf.org/penny's-nde.htm
- 17) B.Elder,And Whenn I Die Will I Be Dead? ABC Enterprises,1987,25~27
- 18) www.nderf.org/hafur-nde.htm
- 19) 私論、ホログラフィック宇宙と臨死体験の世界、人間文化研究 1, 2002, 33~99
- 20) 不可分の統合体、10~13;意識の拡大、57~58
- 21) R.Wallace,The Burning Within,Gold Leaf Press,1994,106~107
- 22) K.Ring,Heading Toward Omega,Quill,1985,199
- 23) [www.near-death.com/forum/Daniel Eli](http://www.near-death.com/forum/Daniel_Eli)
- 24) D.Corcoran,Whenn Ego Dies,Emerald Ink,1996
- 25) N. ドハティ、臨死・天国からの電話、Voice,2003,49
- 26) B.VandenBush,If Morning Never Comes, The Old Hundred and One Press,2003,105
- 27) [www.iands.org/nde-archives/experiencer-accounts/another-chance to live.html](http://www.iands.org/nde-archives/experiencer-accounts/another-chance-to-live.html)
- 28) www.nderf.org/S7s-nde.htm
- 29) K.Ring,Lessons,14
- 30) K.Ring,Lessons,298
- 31) L.Martin,Home,16
- 32) 立花隆、臨死体験、下、文芸春秋、1994, 222
- 33) www.nderf.org/steve-b's-nde.htm
- 34) www.nderf.org/leonard-nde.htm
- 35) www.nderf.org/nanci-d-nde.htm
- 36) www.nderf.org/lynn-m's-nde.htm
- 37) www.nderf.org/sylvia-w's-nde.htm
- 38) www.nderf.org/sue-v's-nde-likeste.htm
- 39) www.nderf.org/mathilde-m's-nde.htm
- 40) www.nderf.org/stephen-c-nde.htm
- 41) S.Boehm,A Near-Death Experience,International Promotions,2002,18~19
- 42) www.nderf.org/bonnie-vb-nde.htm
- 43) www.nderf.org/mathilde-m's-nde.htm
- 44) www.nderf.org/roger-m's-nde.htm
- 45) www.nderf.org/kristin-d's-nde.htm
- 46) www.nderf.org/marta-y-nde.htm
- 47) www.nderf.org/kathy-w-probable-nde.htm
- 48) 4次元空間と臨死体験、人間文化研究 9,2000,15~17;不可分の統合体、15
- 49) [www.iands.org/ndearchieves/ndeaccounts/miss where I was.html](http://www.iands.org/ndearchieves/ndeaccounts/miss_where_I_was.html)
- 50) <http://bibleprobe.com/boris-pileichude.htm>

- 51) www.nderf.org/NDERF/NDEExperiences/bolette1nde.htm
- 52) www.nderf.org/leonard-nde.htm
- 53) www.lovinglight.com/darlene/mysong.htm
- 54) www.nderf.org/anthony-c-nde.htm
- 55) www.nderf.org/joyce-h-nde.htm
- 56) www.oberf.org/jason-r-experience.htm
- 57) www.nderf.org/brian's-nde.htm
- 58) K.Ring, Lessons 295; www.near-death.com/rivers.htm
- 59) J.Long, Evidence of the Afterlife, Harper Collins, 2014, 90
- 60) S.Menet, There Is No Death, Mountain Top Publishing. 2002, 25
- 61) www.nderf.org/tazell-nde.htm
- 62) 私論、4次元空間、16
- 63) www.nderf.org/robert-c-nde.htm
- 64) J.Long, Evidence, 60
- 65) R.Noyes & R.Kletti, Depersonalization in the face of life threatening danger: an interpretation, Omega, vol. 7, 106
- 66) www.theage.com.au/m.harper.to die and come back
- 67) Mindsight, William James, Center for Consciousness Studies, 1999, 161~167
- 68) K.Ring, Life at Death, Quill, 1982, 93.97
- 69) www.nderf.org/tazell's-nde.htm
- 70) www.nderf.org/ray-k's-nde.htm
- 71) www.creatrixstudio.com/artdanbrink.html
- 72) B.イーディ、死んで私が体験したこと、同朋舎、1995, 53
- 73) www.nderf.org/stella's-nde.htm
- 74) www.aleroy.com/boad106.htm:Shirley
- 75) D.Morrissey, You Can See the Light, Stillpoint Publishing, 1997, 28
- 76) 私論、4次元空間、14 ; 5次元界モデルと超意識体、人体科学、14-1, 2005, 42~43
- 77) ターシャム・オルガスム、コスモス・ライブラリー、2000, 327
- 78) www.nderf.org/ray-k's-nde.htm
- 79) www.triton.net/potentialsplus/kessays/neardeath.htm:Some thoughts on my near death experience
- 80) www.oberf.org/shannon-c's-obe.htm
- 81) 私論、4次元空間、123~147
- 82) www.seattleiands.org/stories/universe.htm:Jo Dee Chenaur
- 83) www.near-death.com/goines.html

- 84) P.ヨガナンダ、あるヨギの自叙伝、森北出版、1983,149
- 85) J.Liberman,Take Off Your Glasses and See,Crown.1995,40
- 86) Cap.Dale Black, Flight to Heaven,Bethany House,2010,100
- 87) www.nderf.org/joseph-m's-nde.htm
- 88) J.Macartney,Crisis to Creation,Book Publishers Network,2010,199
- 89) www.dharma-talks.com
- 90) www.nderf.org/burke's-nde.htm
- 91) 私論、先天性全盲者の臨死体験、人間文化研究7, 1998, 125~151
- 92) B.Weiss,Messages from the Masters,Grand central publishing,2000,169~170
- 93) www.nderf.org/patrick-h-nde.htm
- 94) D.Morse,Searching for Eternity,Eagle Wing Books,2000,56
- 95) A.Sudeman, A Pasage to Eternity,Amethyst Publishing,2004,36
- 96) www.nderf.org/cara-m's-nde.htm
- 97) www.nderf.org/brandelyn-w's-nde.htm
- 98) www.iands.org/nde-archives/ndeaccounts/gargantuan_energy_source.html
- 99) 飯田史彦、ツインソウル、PHP 研究所、2006,75
- 100) www.homestead.com/LAtherapist/files/chapter-3.doc
- 101) www.near-death.com/smith.html
- 102) D.プリンクリー、光の秘密、ナチュラルスピリット、2013,22
- 103) R.Wallace,The Burning Within,Gold Leaf Press,1994,96
- 104) E.Durham. ,I Stand All Amazed,Granite,1998,29
- 105) 同上書、19
- 106) www.nderf.org/nannci-r-possible-nde.htm
- 107) www.nderf.org/debbie-nde.htm
- 108) www.nderf.org/sylvia-r-nde.htm
- 109) R.Moody,Life After Life,Bantam Books,1975,58~60
- 110) D.Weilor,Dead is just a four letter word,[http:4 herway.com/4 letterword/thebook.htm](http://4herway.com/4letterword/thebook.htm)
- 111) www.aleroy.com/board_215.htm:HiRider
- 112) www.nderf.org/jule-l's-nde.htm
- 113) www.nderf.org/rosemary-nde.htm
- 114) S.Rogers,Lessons from the Light,Warner Books,1995,15
- 115) www.nderf.org/julie-n's-nde.htm
- 116) www.nderf.org/dann-r-nde.htm
- 117) www.nderf.org/tim-v-nde.htm
- 118) www.nderf.org/S7s-nde.htm

- 119) www.nderf.org/viva-t-nde.htm
- 120) www.nderf.org/mark-j's-nde.htm
- 121) www.nderf.org/francis-mcgl's-nde.htm
- 122) www.iands.org/ndeaccounts/lucid-and-rapid-thinking.html
- 123) J.LeSage(ed) Truly Alive,2010,65~66
- 124) www.nderf.org/augustin's-nde.htm
- 125) E.Winkler,Begenung mit dem lebendigen Licht,Silberschnar,2001,43~44
- 126) I.カリー、あなたは死なない、PHP 研究所、1998,236
- 127) A.Suleman,Passage,30
- 128) www.nderf.org/patricia-c's-nde.htm
- 129) www.near-death.com/forum/nde/9-07.html:Bruce Budden
- 130) 私論、脳死と臨死体験の記憶、人体科学1-2, 2002, 31~38
- 131) L.Tooley,I Saw Heaven,Horizon Publishers & Distributers,Inc,1997,77~78
- 132) S.Farr,What Tom Sawyer Learned from Dying,Hampton Roads Publishing Company,1993,28
- 133) www.nderf.org/dw-nde.htm
- 134) www.nderf.org/bobbid-nde.htm
- 135) R.Kruger,A Higher Good,Publish America,2005,24
- 136) www.theweekender.com/features/6.6 feat.html
- 137) www.nderf.org/odell-h-nde.htm
- 138) B.Malz:www.bibleprobe.com/my-glimpse.htm
- 139) www.nderf.org/lynn-m's-nde.htm
- 140) www.aleroy.com/board.143.htm
- 141) www.nderf.org/patricia-c-nde.htm
- 142) www.nderf.org/kim-g's-nde.htm
- 143) M.Grey,Return from Death,Arkana,1985,53
- 144) A.Gibson,Glimpses of Eternity,Horizon Publishers,1992,159~160
- 145) D.Goble,Through the Tunnel,S.O.U.L.Foundation,1993,65
- 146) www.ndeweb.com/board155.htm
- 147) 片桐すみ子 4 編訳、輪廻体験、人文書院、1991,78
- 148) www.nderf.org/Lana's-nde.htm
- 149) B.Brodsky's NDE:www.near-death.com/Brodsky.html
- 150) www.homestead.com/LAtherapies+files/chapter-3.doc
- 151) www.nderf.org/brian-t's-nde.htm
- 152) www.aleroy.com/board215.htm
- 153) www.near-death.com/forum/0007.htm

- 154) www.nderf.org/odell-h-nde.htm
- 155) W.Buhlman,The Secret of the Soul,Harper San Francisco,2001,87
- 156) W.Barrett,Death-Bed Visions,The Aquarian Press,1986,99~107
- 157) www.nderf.org/ludmila-nde.htm
- 158) R.ムーディ、かいまみた死後の世界、評論社、1985,84
- 159) E. キューブラー・ロス、死後の真実、日本教文社、119
- 160) R.Moody,The Light Beyond,13
- 161) www.nderf.org/kristy-c.nde.htm
- 162) B.Elder,Whenn,,37
- 163) J. アマトウーズ、死ぬことの意味、サンマーク出版、2006、69~78
- 164) C.Lundahl & H.Widdison,The Eternal Journey,Warner Books,1997,155
- 165) 同上書、166
- 166) 私論、不可分の統合体、14
- 167) N. ドハティ、133
- 168) www.near-death.com/forum/nde/001/43.htm
- 169) T.Cohen,The Day I Died,John Blake Publishing,2006,187
- 170) 同上書、178
- 171) www.dharma-talks.com
- 172) 私論、先天的全盲者の臨死体験、人間文化研究、7,1998,123~147
- 173) 私論、意識の拡大、55~71
- 174) Mindsight,182~186